

空気が漂っていた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年一月二日

軍歴 昭和二十年三月一日 印旛郡佐倉町（現

佐倉市）東部第三六二部隊に入隊

満州国興安嶺に転出 同地で敗戦

入ソ年月日 昭和二十年十月八日

引揚年月日 昭和二十三年十月二十三日

在ソ期間 三年一カ月

収容地 ウランウデ

（千葉県 伊藤 千次）

私の昭和史（私と軍隊）

ホルモリン収容所

東京都 堀口 卓也

プロローグ

昭和十九年十一月、東部二十二部隊に現役兵として入隊した。兵科は騎兵であった。二十二部隊は歩兵部隊であるので、そこに駐在するのでなく直ちに戦地に赴くことは察せられたが、それがどの方面かは不明でもあり、果たしてこの時代に馬に乗る騎兵が存在するのか疑問であったが、営庭で革の長靴を支給されたとき、まだあるのだと確信した。騎兵第四旅団で、この旅団だけ終戦まで乗馬騎兵として活躍した。北支が派遣地であった。ここで初年兵教育を受け、百十七師団に転属して工兵となった。

関東軍

一九四一年、日ソ中立条約が締結され、関東軍は関

東軍特別大演習と称して大動員した兵力も對ソ戦は想定しなかったので、ソ連から戦争を仕掛けられるとは想像していなかった。ひょっとしたらとの危惧はあったが、開戦の時は動転した。条約は完全に無視された。

昭和十八年頃から関東軍は南方や内地へ兵員を割かれ、ほとんど無力の存在で、支那派遣軍から四個師団の応援を受けねばならぬ状態であった。

私の所属する百十七師団は、北支から関東軍へ補充された四個師団のうちの一つで、私は、昭和二十年七月一日に支那派遣軍からチチハルの関東軍工兵幹部教育隊に入校した兵科甲種幹部候補生の一人である。

本来、工兵の学校は内地の松戸にあったが、この頃は外地の候補生のうち支那派遣軍は蚌阜^{パシエー}の教育隊、関東軍と朝鮮派遣軍はチチハルの教育隊で教育を受けることになっていた。私は支那派遣軍の一員であったので蚌阜で教育を受けていたが、百十七師団が関東軍の配下に入ったのでチチハルに転属した。

工兵という兵科は人数が少なく、チチハルの兵科甲

種候補生は百人ちょっと、ソ連が攻め入ってきた八月九日は、嫩江で架橋演習をしている最中であった。昨年までは銃は持たずに演習に出ていたそうだが、今年には銃を持参するようにとの指示があり、我々は軍装して演習に臨んでいた。

チチハルはソ満国境の満洲里に程近く、直ちに対戦車壕を掘れとか、いろいろと違った命令が出たが、教育を統行するので新京まで南下せよということになり、八月十二日チチハル駅を発った。

終 戦

ハルビンまで後退したところ、ハルビン駅で終戦の詔勅を聞かされ、しばらくハルビンの駅にいて邦人の引き揚げ列車を幾つか迎えたが、みな着のみ着のままの悲惨な姿であった。関東軍に第一線を後方に移す計画があったことは知らされていなかったため、国境に近い地域の在留邦人は関東軍が守ってくれなかったことに不信感を抱いたのは当然といわなければならない。

ハルビン駅にいたとき満州軍が反乱を起こした。鎮

庄に行くと言令されて重機関銃を持って駅から出動したが、反乱軍と遭遇することなく無事帰還し、街なかの小学校に住まいを移すことになった。大きな小学校のようであったが、ここで銃で自殺する者が出た。中隊長から訓示があり、以後は中隊長に命を預けることになった。

雨の降る日にハルビン競馬場に武器を集積し、近くの空き兵舎に移り、指示を待った。銃には愛着があったし、これを捨てたら何をされても辛抱しなければならぬと覚悟した。

何日ハルビンにいたか覚えていないが、帰国するので各自二週間分の食糧を準備せよとの命令を受け、糧秣の豊富な空き兵舎で米や大豆を煎って靴下に詰め、塩や砂糖も準備して、列車に乗るために宿舎を出た。

このとき初めてソ連兵に接触した。兵舎を出たところ、隊列の両側に二〜三メートル間隔でソ連兵がおり、我々を護送している。行軍が始まるや否や時計は取られる、万年筆は取られるで、めぼしいものは何もかも略奪された。このソ連兵の横暴にはびっくりし

た。第一線の兵隊はほとんどが囚人兵だったと聞いたが、その後接触したソ連兵は皆同じであった。ほとんど全員が略奪した。一人で幾つもの腕時計をしている兵隊だらけであった。

香坊駅から列車に乗って帰国の途についた、と我々は思っていた。が、列車は牡丹江に向かつており、途中、線路が修復されておらず横道河子で下車させられた。後は自分の足しかない。道端のたくさんの人馬の死体を見ながら、三昼夜行軍して海林（ハルビン）に到着、ここで輸送再開まで天幕での自炊生活が始まった。

ソ連兵と顔を合わせたのはハルビンの兵舎から汽車に乗るまでで、その後も、個人としてはシベリアに輸送されるときまでソ連兵とは接触しなかった。

ポツダム宣言

当時はポツダム宣言がどんなものであったか知らなかったもので、戦争に負ければこのような扱いを受けねばならないのかと、辛抱するしかなかった。

ポツダム宣言受諾は無条件降伏だといわれているが、それは違う。日本から条件がつけられなかっただ

けで、宣言国自らが「吾らの条件は左のごとし」と条件をつけている。「吾らは右の条件より離脱することなかるべし」ともある。

その条件の中の九項に「日本国軍隊は完全に武装を解除せられたるのち、各自の家庭に復帰し、平和的かつ生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし」とある。日本が受け入れやすいように考えての条件が入ったのだと考えるが、ポツダム宣言は日本に対して出された宣言であり、他の国に対するものとは違う。日本軍人を捕虜と扱わないということであり、かくて戦争は終結したはずであった。

日本がこれを受け入れて降伏した以上、宣言国はこれを守る義務がある。アメリカも中国もポツダム宣言を尊重した。ひとりソ連だけが、宣言国に加わりながらそれを無視した。

戦陣訓で教育され、もはや死ななければ帰れないと覚悟していた軍人が、どうして抵抗もなく戦火を収めることに納得したのか。敗戦となればどうなるか、みんな心配していたはずである。それなのに整然と終戦

となった。不思議であった。

萎えようとする兵隊を鼓舞して戦闘させる指揮官が、率先して見本を示した。命令には絶対服従である。我々の指揮者も、その上の指揮者の命令に従う。これが日本の軍隊である。その命令が「牙を収めよ」であった。

なぜか。後にポツダム宣言を読んで納得した。ポツダム宣言は、日本に対する宣言であり、日本軍人が受け入れやすいように、捕虜をつくらず、直ちに内地に帰し生業に就かせる旨宣言していたのである。当時、末端の我々の知るところではなかったが、国の中核にいた為政者はこの条項を見て心を動かしただろうか。

大本営も直ちに「詔書渙発以後敵の勢力下に入った者は俘虜と認めず」とのおふれを出した。大本営命令は天皇の命令であり、旧憲法下においては天皇の命令は勅令であり、法律である。日本は、国の取り扱いとして、ここで矛を収めても捕虜と扱わないということを経営で明らかにした。軍の中にはあくまでも戦争を

遂行すべしとの意見もあったやに聞くが、大勢が詔書必謹となったのも頷ける。

九八九八命令

最近になって、我々を抑留し労働力として使用するスターリンの出した九八九八命令というのを知ったが、これは詳細な人員配分の計画で、一朝一夕にできるようなものではなかった。スターリンは開戦前から日本の疲弊を知り、関東軍軍人を労働力として使用することを計画していた。そればかりか、領土の拡大も計画していたようだ。八月十五日以降も千島に攻め込んできた一事を見ても明らかだ。

一時は関東軍軍人を自国に輸送しないと、ポツダム宣言を守る様子を示したらしいが、その二週間後に、スターリンは所期の労働力として五〇万人を抑留する九八九八命令を実行させた。抑留された日本人向けの日本新聞も、九月十五日から発行されるといふ準備の良きであった。日本をだまし、我々をだまして抑留したスターリンはけしからん。

この強制抑留で日本人は六万人余の死者を出した。

資料が不十分ではあるが、もっとも犠牲者があったと思われる。

入　　ソ

厚生省の『引揚げと援護三十年の歩み』によれば、満州（中国北東部）の海林に集合した関東軍将兵は五万一千人で、五十三大隊編成されたとある。帰国のために千人単位の大隊を編成し、第一大隊から順次帰国のために出発していった。私の属する一五〇大隊は、候補生を含め下士官ばかりで編成された。仲間のうち数人は、実力と階級章の軍曹を生かして指揮者の少ない大隊の小隊長として転属したが、候補生の大半は一五〇大隊の一員となった。

一五〇大隊は出発の順序が後になる。候補生である以上、一般兵より帰国が後になるのはやむを得ないと納得したが、これは帰国ではなくシベリア送りで、早く出発した者はそれだけ苦勞が多かった。

大隊長は関東軍工兵幹部教育隊の中隊長であった浜口大尉であったが、いよいよ出発のとき、大隊長は小路少佐になっていた。これは人数が少ない一五一大隊

を合併したからだと後で知った。小路少佐は一五一大隊の大隊長であったが、階級が上の者が指揮するのが軍隊のしきたりであったからだ。

私の一五〇大隊は一九四五年十一月中旬にシベリアに入り、十二月にホルモリン収容所に到着した。日本人を帰国だと信じさせたソ連のシベリアへの移送は実に見事であったと言うほかない。我々は毫も疑わなかった。上手に我々をだました。千人単位にしたのは作業をさせるためであったことを帰国してから知ったが、当時作業大隊であると知らされたらどうなっていただろうか。あのようには整然とは輸送されなかったのではないだろうか。

ホルモリン地区

一五〇大隊が入ったのはホルモリン第二一七収容所であるが、入ソ後の生活は、一年目、二年目と、年を経るごとに変化した。私は昭和二十二年に帰ったので、ソ連での生活の最も悪い時期だけを体験したことになる。二十二年六月以降の生活がどう変化したかは体験できなかったが、私のいた時期は、糧秣的に生存

には最も悪い時期であった。しかし、比較的早く帰れたおかげで洗脳などが激しくなる前に帰国できたのは幸いであった。

ホルモリン現地にトラックで深夜に到着し、荷台から降りたとき、車中で配給された内側に毛皮のついた関東軍の防寒靴を履いているのに、足の裏に針の刺さるような寒さを感じた。地獄の針の山はこういうのかな、生きて地獄を味わったという感じであった。それでも重い荷物を背負って十分歩くと汗びっしょりになった。着いた宿舎は古い古い丸太小屋、今の言葉ではログハウスと言うのだろうか、そんなしゃれた家ではなく、囚人の収容施設であった。空き家だったので、四人の収容施設であった。空き家だったので、すきま風で寒く、防寒靴下の上に軍隊の防寒大手袋を履いて、毛皮の防寒外套を着たまま横になった。枕元で零下六度であった。

もう十二月になっており、近くの製材所からおがくずを運び建物の裾から入る風を遮断し、薪を収集して暖をとり、数日のうちに室内では寒さを知らぬ生活ができるようになったが、食べ物が少なく、毎日飢えと

の戦いであった。

作業は、伐採に道路工事、仕事は重労働であった。

この人道に反する仕打ちをされたことを我々は何がなんでも故国に報告しなければならぬ、死んでたまるか、がんばれと、身に心にむち打ってがんばるしかなかった。

伐採は主として冬に行われた。木のやにも凍り鋸につきにくく、伐採に好都合だからだ。朝暗いうちに宿舎を出て夜暗くなって宿舎に帰る毎日であるが、寒い中、朝うすいスूपのようなカーシャ（お粥）で食事を済ませただけで、重い衣服をつけ、鋸や斧を携えて雪道をコンボーイ（警戒兵）に先導されるとほとほと目的地に向かう。出かけるときも帰るときも星を眺めての行動であった。ちよつとも風が吹けば寒さが重複され、風に向かつては歩けない。ひたいに何本もの氷の針を刺される痛さであった。

山に入って伐採が始まる。直径が五〇センチもある大木を伐り倒すのである。私等は三人一組で、二人引き鋸を二人が向かい合って挽く、一人は倒された大木

の枝を払い、焼却する。まず伐採する木の回りの小さな木を伐り倒して足場をつくり、逃げやすいようにしておいて伐りにかかるのであるが、時には木が思いがけない方向に倒れ、危うく木の下敷きになりそうになった。

そのうち気温が零下三〇度以下になると作業中止となったが、山中に散開して木を伐っており、なかなか集合命令が届かず、集合に一時間以上もかかった。気温はその間も下がり続けている。冷たい。頬がこわばってしまう。

このほかシベリアではいろいろの仕事をした。馬そりでの木材の運搬、木材の検収係、製材所の丸太積み、列車への積み込み、鉄道敷設、保線、パラスおろし、道路整備、炊事の水運搬、衛兵所勤務、その他。二年間ではあったが、いろいろの仕事をした。

極限の生活

衣・食・住すべて最低の生活である。今振り返っても恐ろしい。よく生きていられたと思う。最初の一年は特にひどく、生き延びるには足りない最低最少の食

事で、二十一年正月の給食など、飯ごうのふたに七分目の、容器を傾けると底を粟がさらさらと流れる音が聞こえるような澄まし汁、動けば消耗するので、用のない時はじっと寝ころんでいろと日本の軍医に指示され、用のない時は常に横になっていた。栄養失調にならないのが不思議なくらいであった。

日本軍医はわれわれの身を案じ、ビタミン補給のためドロージという松葉汁を飲ませた。野草も食べた。茸も食べた。口に入る物はなんでも食した。

そんな少ない食事でも、何日かのうちには大の方のトイレに行く。日本人は大便後、紙で尻を拭く習慣がある。そうしなければ汚い。ロシア人は尻を拭く習慣がないのか、満州での行軍中、野々そをたれたロシア人が尻を拭かずにズボンを引き上げるのを見た。彼らは日本人のように軟便ではないらしい、紙で拭く必要がないのだなと変なことに感心したが、我々はこの紙のないのに苦労した。満州から持ってきた紙は、本であろが、ボール紙まで何とかして使って処理した。そのうち日本新聞がこの役を果たした。それも小さく

切って最小限で目的を果たす。この新聞紙はタバコの巻紙にもなる貴重な存在であった。ある時期、満州人の衣服である綿入れの満服が支給されたが、この綿を少しずつ親指の先ほどの大きさにちぎって使った。少量で始末するのに慣れ、上手になった。

尾籠な話を続けて申し訳ないが、トイレは開放的で、穴を掘った上に板を渡してあるだけなので、他人の排便が見られるのである。食べる物が少なく、食べた物ほとんどん消化するため排泄に行かない。何日も便意を催さず、たまたまトイレにうずくまってもなかなか出ない。そのうちに大腸そのものが肛門から垂れ下ってくる。脱肛というのだろうか。ひどいものだ。見ている者も痛々しい思いをするが、本人は辛いことだらう。私も帰国後、肛門科のご厄介になったが、便秘の苦痛の上に不潔そのものであったのだから仕方がない。

冬季は便が凍り上に上にと重なって、ちょうどつらさを逆さにしたように下から肛門に向けて槍を突きつけている状態なので、よほど注意しなければ糞の槍に

串刺しになってしまう。これを取り去るのに、つるはしで崩す。そのかけらが衣服のどこかに付いてしまうと、暖かい部屋に帰ったときそれが溶けて匂い出す。いろいろの苦勞があった。

毎日着たきり雀で、顔は洗わず歯は磨かず、シラミは湧く、風呂なんて入ったこともない。バーニヤ（風呂）といっても、大きな釜を伏せて下で火を焚き、戸外からシヨベルにすくってきた雪を釜底にぶつけて、じゅっと上がる蒸気に当たるだけ。頭部は熱いが足元は零下という状態で、洗うお湯は一人飯ごう一杯だけ。それも何か月に一回という回数で、今日は右手だけ洗おう、次は左手だ。それも二人組になってでなければ石鹼を洗い落とすことができないという状態であった。

誰でも我々には毎朝歯を磨く習慣があった。それができない。歯ブラシも歯磨きも手に入らない。初めは気持ちが悪かったが、そのうち歯など磨かなくても平気になった。磨かなければ磨かないで、口の中も常にさっぱりしている。体が自然にそれに対応するように

なるらしい。だからといって虫歯が増えたとも思えない。顔を洗っても、頭を洗っても、拭くことさえしない。体になれるのか、皮膚がなれてしまうのか、そういう環境に対応した体になる。これが自然なのだと感じた。

帰 国

伐採作業中、斧で足の親指を切り落としそうな大怪我をした後、しばらく衛兵所勤務をしたときに、ロシア人の教育程度に触れる機会を持ったが、算数の能力が非常に低いことに驚いた。足し算でさえなかなかできない。かけ算など特に難しいらしい。作業の行き帰りに人数を数えるのに時間がかかる。このため我々はずいぶん寒い思いをさせられた。しかし、音楽的才能には感心した。複数の人間が寄るとすぐ合唱である。楽器を奏するもうまい。

幾つかの収容所を転々とさせられたが、作業の激しいところ、それほどでもないところとあり、作業の激しい収容所に入って一カ月も経たないうちに三級になり、作業免除の収容所に移り、洗脳教育を受けること

になった。昭和二十二年の春だったように思う。

中央（といってもハバロフスクだと思いが）から来たオルグに呼び出されて、「お前の班にオルグ候補者が何人いるか」と聞かれたり、「オルグを交代しろ」「新しいオルグに協力しなかつたら反動分子と見なす」と脅かされたり、いろいろのことがあったが、私の班に知恵者がいて、あたかも洗脳されたように朝から晩まで赤旗の歌を合唱し、私の班は帰国する半分の方に選考されて、間もなくナホトカへ出発できたのは幸いであった。私は「オルグを交代しろ」と言われたが、それまで私はオルグであつたらしい。確かに班長として何十人かをまとめる役をしていたから、それをオルグと言つたのであろう。

幸い知恵者の知恵が功を奏して帰国組に加えられたが、ナホトカで乗船を拒否された者が出たときはびつくりした。日本人が日本人を選択するのである。悲しい出来事ではあつたが、他人のことは干渉しておれない。不服を言いかけたが、口をつぐんでしまった。「あれは盗癖があるから帰国させてはならぬ」と言う

者がいたから、あるいはその男が何かの理由を付けて当局に密告したのかもしれない。

復員

一緒に帰る船には私の入ソ当時の仲間は一人もいなかった。将校の一人もいない。下士官もごく少数の帰国船であつた。その時は船名も知らなかったが、日にちから察して第一大拓丸であつたようだ。かくして昭和二十二年六月十九日付の引揚証明書もらい舞鶴援護局で復員した。

舞鶴に上陸したときは二世のアメリカ兵が両手の人さし指で我々を誘導したので、ソ連の捕虜からアメリカの捕虜に管轄が替わるだけかとがっかりしたが、切符をもらつて故郷に帰れると知つて、この点は安堵した。しかし、果たしてわが親姉妹は無事なのか、家は焼けずに残っているのか、それが心配になつた。

私の帰る家は大阪にある。そこに母と妹が住んでいらずである。舞鶴に、大阪の空襲で焼けた場所の斜線入り地図が掲げられていた。その地図によるとわが家は焼失しているが、舞鶴に手紙も来ていない。ひょ

っとしてわが家だけ残っているかもしれない。一縷の希望を持って帰った。生まれ故郷は一面の焼け野が原であった。わが家も灰になっていた。遠くに一、二軒焼け残っている家があったが、近所はみな灰である。

終戦後二年も経っているのにまだ廃墟のまま。尋ねる相手もない。こういうときは姉の嫁ぎ先に行こうと決めていたので、また電車に乗って姉の家に出かけた。連絡の方法がなかったので、とにかく行くしかない。

姉の家は、到着したら表札が変わっていた。引越した後だった。心配は極度になった。が、隣人が親切に教えてくれた。みんな無事だということだったのでほっとしたことを覚えてる。母と妹に再会し、ビールを飲んで無事を祝った。

帰国後

私の帰国した頃は、一度住民登録をするとなかなか移動ができず、移動証明がなければ配給ももらえない時代だったので、大阪に住民登録することなく、一週間ほど母親の元にただで上京し、直ちに衆議院事

務局に復職した。二十三歳であった。

帰国してから何年間は、シベリアに呼び帰される夢をみては跳び起き、冷や汗をびっしょりとかいた体験をした。

二十三年ごろからシベリア帰国者の代々木直行とか思想問題が新聞に載るようになり、国会でもこの対策が練られた。帰国時にアメリカの二世から尋問を受けてアカのレッテルを貼られてしまい、故郷に帰っても就職ができず、共産党の仕事しか手に入らなかったと述懐する戦友もいる。洗脳がシベリア抑留の目的の一つでもあったから警戒された。これも抑留者の被害である。GHQに何度も呼び出されたという話や、帰国後何年も尾行がついたという話も聞いた。日本国家だけでなく、世界がシベリア抑留という人道に反した行為を長い間放置したことも、その根源にある。二度とあのような人道に反することがこの世界で行われないことを強く期待する。

私は幸い職に復帰でき、公務員として四十年勤め上げて退職、現在、財団法人全国強制抑留者協会の事務

局長として抑留者のための仕事をさせてもらっている。

日本の将来のためにも、政治家は戦争犠牲者の処遇を親身になって考えるべきだ。国のために犠牲になった者の処遇をちゃんとしておかないと、今後国のために働く者は馬鹿だということになる。正直者が馬鹿を見るようなことのないように為政者ははっきりと処置しておくべきだ。

私にとってシベリア抑留は何だったのだろうか、今も解決していない。

【執筆者の紹介】

入隊前の略歴

昭和十七年 三月 大阪市上宮中学校卒業

四月 衆議院速記者養成所入所

昭和十九年 七月 衆議院事務局奉職

入隊後の略歴

昭和十九年十一月 中部二部隊補充隊（騎兵）入

隊

騎兵第四旅団第二五連隊に転属

（北支）

昭和二十年 五月 一一七師団工兵隊（弘兵团）転

属

七月 関東軍工兵幹部教育隊（在チチ

ハル）に甲種幹部候補生教育の

ため入隊

八月 終戦・ハルビンにて武装解除

十一月 綏芬河經由入ソ、ホルモリン収

容所着 以後各収容所移動抑留

生活

昭和二十二年六月 舞鶴上陸復員

復員後の略歴

昭和二十二年六月 衆議院事務局復職

昭和五十九年七月 〃 退職

現在

(財) 全国強制抑留者協会事務局長

(埼玉県 饗庭 秀男)

流転の兵役と抑留

東京都 岩 本 行 夫

人事係加藤曹長より話があるというので、夕食後、

中隊事務室に私たちは集合した。話は、下士官候補に進むようにおだて脅かし説教をされた。同期の大久保君は、入隊時に下士官候補を希望したのに落とされたのだ、残留して今度は下士官になれとは何だと憤慨していた。私たち残留者は全員下士官候補になるように、曹長は説明ではなく脅かした。自動車手から池本、北村二人が下士官候補に進んだ。池本は、班長が話をしたのでその気持ちでいたらしい。北村は、岐阜自動車学校に行っていたのでいやおうなしに下士官候補にされた。二人は一選抜の上等兵になり、私たち同期兵もその後上等兵に進級した。曹長は私たちに度々きつ

いことを言っていたが、私は兄が面会に来た時の言葉が気になって、他の同期兵と共に断り通した。

同期兵の自動車手 大久保、永田、金子、太田、私

〃 下士候 池本、北村

補充兵と転科兵の自動車教育では、補充兵は体格が貧弱で軍隊生活に耐えられるのかと可哀相に思った。

各教育を三カ月終わると各部隊に転属していくので毎日多忙だった。

自動車操縦教育はガソリンが制限され、兵隊の使用量はわずかだ。器材班の製作した模造の操縦台に乗り、私たちの号令でハンドル(転把)、クラッチ(連動器)、アクセル(速度板)、ブレーキ(停止板)を動作した操縦教育で、自動車を全然知らぬ兵隊であった。

構造の説明は車両実地で教育、講義するのは技術者の古参兵で、私たちも良い勉強になった。私たちが初年兵の頃は操縦が主で、構造は教科書と航空兵操典を読みだけだった(私は小型免許証を持っていた)。冷たい車庫内で講義を聞くので兵隊の中には居眠りする